



「加害の記憶」めぐる対立

戦争の記憶の伝わり方には

くせがあるのだな。

99歳のジャーナリスト、お

ただじさんに話をうかがっ

て、そう感じたことがある。

戦時中に、従軍取材をした

おのさんは数年前、女性たち

の勉強会で「戦場で何があっ

たんでしよう。父は教えてく

れないんです」と問われた。

殺される恐怖の中、殺し、

奪い、犯す。見聞きしたこと

を伝えると、女性たちは「も

らめて」と耳をふさいだ。

空襲被害は多くの人が体験

したが、加害の現場は主に海

外の戦地だし、妻や子に言い

にくい。加害の記憶を受け継

ぐのは、被害以上に難しい。

加害の記憶が薄れる二こま

なのか。そんな思える動きが目

にとまり、大阪を訪ねた。

大阪府と大阪市が出資する

博物館「大阪国際平和センター

」（ピースおおさか）の展

示が変わるといっているのである。

戦争の被害に加え、加害に

着目した展示内容は公的施設

ではめづらしい。南京大虐殺

の一角には、折り重なる遺体

の写真などが並ぶ。だがまも

なく加害展示の大半が消え、

大阪空襲中心に切り替わる。

戦争の記憶を残そうといっ

声の高まりを受け、1991

年に開館した。しかし、90年

代後半には風向きが変わり、

もみくちやになる。

南京大虐殺は「20世紀最大

の嘘」と題する集会に施設を

使いたい、といった申請が続

き、応じると市民団体や中国

当局から抗議を受けた。その

後はトランプルを避けるため、

施設貸し出し事業をやめた。

このころ、同種の問題が各

地で起こる。村山談話をはじ

め、日本の責任を認める動き

に反発が広がったのだ。

東西冷戦は終わり、イデオ

ロギン対立は後景に退いた。

一方で、戦争を知る世代は減

るか」をめぐると対立が先鋭化

していく。「左翼」はいまや

加害を伝えようとする「自虐

史観」の持ち主に貼るシッチ

ルど化した。東アジアの緊張

の根も、記憶の対立にある。

加害展示への風当たりは強

く、守勢に立たされたピース

おおさかは論争を招く展示変

更を避けてきた。だが展示の

傷みも進む。そこで、大阪空

襲に焦点を絞ることにした。

展示変更の監修委員を務め

る歴史学者、小田康徳・前大

阪電気通信大学教授は話す。

「いまの展示にも良くない

点があります。日本がひどい

ことをしたのはわかるが、そ

の背景が見えてこない。見る

人が、日本人は残虐な民族だ

という結論に達してもおかし

くない。それは絶対に違っ

「加害をすべて展示するの

は無理です。でも、日本が先

に重慶を爆撃し、米國がまね

た。そんな経緯にも目を向け

る必要があります」

加害から目を背けてはなら

ない。同時に、単に残虐な光

景を見せればよいという発想

も甘いといふことか。悲慘さ

が伝わる一方、見たくない、

認めたくない感情も誘い、対

立を深めているように思う。

対立を乗り越え、先に進む

知恵が要る。

いまして、國が戦争に踏み

出し、人を加害に駆り立てる

構造を見つめ直す時なのだ。